

思い出の動物たち（6）

～サル山、サル捕り物語～

小 松 守

（秋田市大森山動物園～あきぎんオモリンの森～園長）



大森山動物園のサル山は人気スポットの一つだ。人気の理由は、開放的環境で母子ザルから老齢ザルまで、100頭ものサルが見せる様々な生き様に人は何かを感じるからか。

今回はこのルーツ、京都の山間でのサルの生け捕り体験談としたい。決して大仰な野生ザルの捕獲武勇伝などではないが、長い動物園人生で野生動物の生け捕り経験は後にも先にもこれだけだ。

思い出は40数年前のこと、当時は展示動物の充実が急務で、サル山の建設も計画されていた。サルは各地の動物園からの分与を考えていたが、この頃、遠く離れた京都府の山間、宇治田原町で人や畑に悪さをするサルの群が問題になっていた。同町はサル対策を愛知県犬山市にある日本モンキーセンター（動物園）に相談し捕獲を検討、捕獲サルを大森山が引き受けてくれるなら町は捕獲申請を行うという情報があった。

関係者の思惑が合致、当園も捕獲に関わることになり、若き獣医師にその役目が回ってきた。1981年の春、既にサル山は完成、春の開園を控えた3月上旬、私は京都に向かった。

思い出ばなしの前に、サル山とニホンザルの雑学を少しばかり。まずはサル山、この飼育展示方式は日本独特の展示文化とも言える。ずっと以前にニューヨーク・セントラルパーク動物園でニホンザル展示を見学した際、そこの美人キュレーターが日本の動物園のサル山を参考にしていると教えてくれた。日本独自のサル山展示

方式が生まれた背景には、世界でも最先端をゆく日本のサル学研究があったからだろうと思う。

もう一つはニホンザルのことだ。そもそもサル類は森という三次元空間で進化し、手指の器用さを獲得するなどして脳を特異的に発達させた動物で、多様な環境に柔軟に適応し生きてきた。その最たるサルが人、自身が生きる環境さえ改變している。

世界のサル分布の基本は赤道を挟んだ南北回帰線の内側、熱帯や亜熱帯の気候区だが、何にでも例外はあるもので、雪が降る場でも生きる強者ザルも登場した。人とニホンザルだ。人はさて置き、降雪地にも生息するニホンザルを欧米のサル学者は“Snow Monkey”とも呼ぶ。下北半島の脇野沢村の個体群は最北のサルとして有名だが、白神山地のサルも時に話題になる。

大昔、アジア大陸の東南部にいたサルのうち、大陸から分離以前の日本あたりに生きたものが、やがて日本が島に分離されると、そこで独自の進化を遂げたのだ。それがニホンザルだ。寒冷化しても温かい南に移動もできず、毛を厚くし、群れ塊るなどして、耐え生き抜いた知恵者だ。

閑話休題、サルの捕獲話だが、私が関わったのは最後のほんの一コマであり、サルの捕獲環境整備は前述の日本モンキーセンターの技術指導の下、既に終えていた。捕獲時に教えてもらった全体の作戦も実に興味深く、思い出ばなしに登場させたい。

サルの捕獲施設は山林を伐採した林道脇に造られていた。直径20m、高さ4～5mくらいの



大きさだったろうか、山間には不釣り合いな囲いは、要塞のようにも思えた。囲いの内側上部には、閉じ込められた時、逃げるサルの手掛かりを無くすため3 m程度のトタン板が張られていた。下部は中が見通せる金網張り、1 m四方のサルの出入り口が4か所開口し、それぞれに落とし戸が仕込まれていた。戸の吊り上げロープ4本は滑車越しに1本にまとめられ、柵内にある監視室に引き込まれ固定されていた。

監視室内では1本にまとめられたロープが丸太のまな板の上でピンと張られ、傍にロープ切断用の大鉈が置かれていた。案内人の話が印象的で今でも覚えている。「ロープを切るタイミングが難しいんや！間違えたら、群れ捕獲は水の泡や。鉈振りは緊張するで!!」関西弁は緊張感を増幅させた。サルの一網打尽には落とし戸の同時落下が必須、だからロープ切断は作戦の成否に直結しているのだ。

作戦は一年も前から進められていた。山林伐採での環境整備、毎日の餌付けやサルへの人の慣らしなど、根気のいる作業だったろう。飼育を経験する者として痛いほどわかった。

囲いづくりはサルが人や状況に慣れてから始められた。柱を1本建てては少し休み、2本建ててはサルにたっぷりの餌をやるなど、急激な環境変化でサルに違和感を持たれないようにするのがポイントだと言っていた。工事でサルが近づかなくなったらは大変だ。賢いサルは環境変化に極めて敏感なのだ。最終段階でのトタン張りを始めた時、何かを感じたのかサルが数日間姿を見せなかった時は大いに焦ったそう。それでも毎日、餌付け作業を続け、戻ってきた時は皆胸をなでおろしたと言っていた。最初に姿を現したのは若ザルだったそうで、どこか人の若者と似ていなくもない。

群れを如何にかためて中心部に誘き寄せられるかが最大のポイントだったとも教えてくれた。すばしっこいサルは落とし戸付近にいた場合、

逃げられてしまい、群れ捕獲は失敗に終わるのだ。怖さを味わったサルは、その後はおいそれと囲いには入らず作戦は失敗に終わる。チャンスは一度だけだと。サル捕獲にかかる山間の人々の思いは半端ではなかった。

捕獲実行日の朝、餌付け人は普段通りに「おい、飯だぞ」と声を発し中に入った。数分後、何匹かの若ザルが森から現れ、囲いの中に入った。満足気に「ホイッ、ホイッ」と発した声を聞いてか、他のサルたちが三々五々森から湧き出、やがて柵内に入り始めた。しだいに数が増え、私たちも遠く的車から固唾を飲み様子を窺っていたその時、「ロープ切断」の無線が入った。あっという間の判断だった。

パニックで狼狽えるサルの動きを見て、落とし戸が皆落とされたことを実感した。

捕獲班は皆一斉に車を飛び出し、遅れをとるまいと私も走った。管理者専用扉を通り抜け、柵内に入った時のサルたちは「やられた」とばかり必死の脱出劇を試みていた。トタンをよじ登るもの、闇雲に走り回るもの、茫然と抱き合う母子ザルなど、サルたちのパニックは治まらなかった。我々も必死でサルを玉網に入れ、首根っこを鷲づかみにして、兎に角、1頭1箱に放り込み続けた。10名程度での捕獲作業はものの20分も要しただろうか、36頭のサルの捕獲はあっという間だった。箱蓋は釘で固定され捕獲作業はすべて終えた。意外なほどスムーズなクライマックスだった。全頭は一旦、日本モンキーセンターに送られ性別等の確認作業が行われた。大森山に輸送されたのは33頭、闘争回避のため強い雄は1頭だけにしてくれていた。その雄につけられた名は「森太郎」、今はもういない。

あれから約40年、京生まれのサルたちは、自然増と自然減を続け今では約100頭、何年か周期で秋田の雄ザルが、京の雌ザル見たさにサル山にやって来るが、今でも京ザルの純血は守られている。社会増も社会減もない。